

週日の説教

金 大烈 神父 2009年3月12日(木)

《神様を信頼し、頼りましょう》

今日の福音(ルカ 16・19 - 31)はあまりにも有名な物語ですが、福音に入る前に第一朗読(エレミヤ 17・5 - 10)で読まれた内容とその預言をしたエレミヤについて考えてみたいと思います。以前、エレミヤ預言者については、説明をしたことがあります。もう一度話をしてみます。彼は、人間的に見ると預言者の中で一番不幸な人生を送った人です。神様からいただいた生まれつきの性格は、内向的で詩や歌、黙想することが好きな人でした。人の前で意見を言うタイプではなくて、いつも心に納めて黙想し、そこから正しい真理を探し求めるタイプでした。しかし神様は、このエレミヤを酷使します。性格と全くあわないようなところへ行かせ、誰が聞いても腹を立てるような内容ばかりを話させます。エレミヤは、そのようなことにとっても悩み、"出来ません"と断わりながらも結局は、人の前で厳しい預言を言い渡します。そして、死ぬときも本当にみすばらしい形で死んでしまいます。これが人の死に方だとは思えないような死に方で、この世を去ります。しかし、彼の言葉をよく黙想してみると、私たち人間の考える幸せと、神様の考える幸せとは、全く違うことに気づかされます。エレミヤにとって、幸せのために歩まなければならない道はただ一つでした。そしてそれは、今日の預言の中に書かれています。

「祝福されよ、主に信頼する人は。主がその人のよりどころとなられる。

彼は水のほとりに植えられた木。水路のほとりに根を張り、
暑さが襲うのを見ることなく、その葉は青々としている。」

そうです。この預言者が頼った唯一の力は、神様でした。「あなたが望まれたから、私はそのようにします。辛い、苦しみばかりの人生ですが、あなたに頼れることを一番大きな恵みと信じ、あなたを信頼します。」という気持ちでした。

これがこの預言者の生き方の、一番素晴らしい宝石のようなところではないかと思えます。私たちもエレミヤをとおして、本当に頼っているのか、何に頼っているのか、何を一番頼らなければならないものと考えているのか、いつも考えるべきではないかと思えます。

今読んだ箇所の前には、このように厳しい預言が書かれています。

「主はこう言われる。呪われよ、人間に信頼し、肉なる者を頼みとし
その心が主を離れ去っている人は。」

私たちの心も、この預言のとおりならば、呪われるほうに傾いているのではないかと思えます。これは人間の弱さのためでしょう。

今日の福音(ルカ 16・19 - 31)は、ラザロの話です。ラザロが善い人生を送ったのか、悪い心を見せて生きたのか、そして金持ちが悪い生き方をしたのか、善い生き方をしたのか、全然書いてありません。ただ、金持ちは、陰府(よみ)に落ち、ラザロは天国に行ったのです。なぜこのように道が分かれたのか、モーセに寄れば、「あなた(金持ち)は、生きている間に十分にもらったが、ラザロは、全然もらわなかった。あなたは良いものをたくさんもらったが、ラザロは悪いものばかりをもらった。だから、死んでからは逆にしよう。」と書いてあります。これはどういう意味でしょうか。

皆様、もし100円しか持っていないなくても、満足できればその人は豊かになれます。もし1000万円持っていて、いつも満足できなくて何かを追いかけようとしていれば、その人は貧しい存在です。私たちが福音的に求めなくてはならないのは、やはり豊かさです。豊かさは、手にあるものが多いか少ないか、には全く関係ありません。私たちが真の豊かさを体験するためには、生と死を全体的に見て、絶対的な存在に頼らなければなりません。その心が許されれば、何か難しさがあっても私た

ちは感謝の心で乗り越えられるでしょう。

追い求めましょう。そうすれば、病にも経済的な困難にも、希望を持って生きられると思います。

ありがとうございました。